

秦 孝治郎氏追悼のことば

住 谷 悦 治

秦孝治郎先生は真に名実ともに法人同志社の中心として、指導と経営に当たられました。

御老齢などとは申し上げられない活力をたたえられ、つねにオール同志社の発展のため清新な、はつらつとしたヴィジョンをおもちになり、その目的に対して明快・適切な判断をもって事を処理され、頭脳の衰えなどということは微塵も感じられませんでした。このことはお近くにおりましたわたくしなどまことに驚嘆に堪えないものでありました。自らには厳しく周囲の人びとに優しく、ちょうど、新島先生が初めて勝海舟翁を訪ねられたとき、翁が先生へ揮毫して与えられた愛誦の「六然」の句、唐の醉古堂劍掃の「自処毅然、処人霽然、無事澄然、有事嶄然、得意冷然、失意泰然」ということは通りであるといつも感じておりました。新島先生は生涯、その言葉を愛誦せられまして、現在も新島旧邸の書斎入口の上に掲げられてある篇額に見られる通りであります。わたくしは秦先生を想うごとに、この「六然」の句の中の前二句を思い出します。

霽然としていわゆる大人の風格を備えられておられた秦先生は、内に確固とした信念の筋金貫徹していたことは、会議や団体交渉などのときにも如実にあらわれたことをわたくしは覚えておりまして、いつも畏敬の念に溢れておりました。

わたくしは大正十年ごろ学生・生徒の時代、キリスト教会に通うようになりましたが、教会の青年の間に「共励会」というものがあって先輩の指導奨励のもとに若い人びとを集

めて信仰上の切磋琢磨をしておりました。学生生活を終えて同志社学園の一員となつたとき、ずっと後になって秦先生が理事長になられたころ、昔のあの「基督教共励会」は、その昔、秦先生がその創始者の一人であり、共励会長であつたということを知り、そうであつたのかと驚いた次第であり、またそのことについてお礼を述べたことがあります。「基督教共励会」は、大正十年前後、教会の青年学生に、つきぬ信仰の泉を与えたものでありました。秦先生の功績は、このことにおいても不朽であり、すばらしいものであると思っております。

昭和年代におけるひろく各方面での秦先生の御活動は先生の輝かしい略歴が如実に示しておりますのでわたくしなどの贅言を要しません。趣味の陶芸については、湯浅八郎先生や西垣 温、西邨辰三郎、生島吉造諸氏とともに単なる趣味ということを超えて、専門家の仲間としてその深い芸術の世界に突き進んでおられたと思われ、秦先生のその心境は羨望の至りでありました。

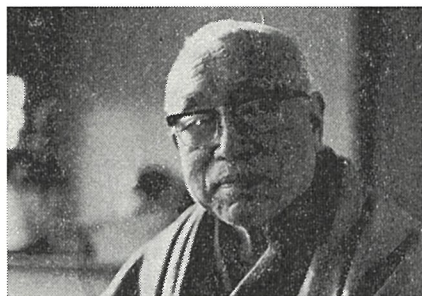
とくに毎日のようにお顔に接している同志社本部の七十名前後の事務職員たちは秦先生の御人格を敬愛・思慕し、日常実に喜々^{もろもろ}然として職責に励んでいたことをよく知っておりますので、亡くてぞ人の恋しかりけるで先生の御徳を想うや切実なるものがあります。全同志社の秦先生追悼の社葬において司会者としてのわたくしは、先生の法人同志社における御功績を讃えることばも知らず、愛惜の思いも述べる術なく、先生が全同志社の発展と育成のためにお尽くしになった数々の思いをこめて、さる文人の句、

菊作り 菊見る時は 蔭の人

という一句を思い出し、百年後に同志社が花咲くときに、秦先生を結びつけて秦先生のお姿と御功績とを想いつつ、哀悼の意を表しましたが、いままた、わたくしはつきせぬことばに替えてこの同じ句を先生に捧げて、追悼のことばと致します。(同志社総長)

普通学校時代

平 田 甫



1972年1月、横浜にて

年に編成され、彰栄館を使っておった。

三学年B組に、ある朝一人の田舎風の体の大きい学生が入って来て、五人掛けの長椅子の前の席に坐った。机などは無い。右の肘掛けの先が本を置いたり字を書く位の台になって居る。「これは此度入って来た秦孝治郎君だ」と紹介されたので、僕らの頭文字「H」のつく五人の中に加わった。東平三郎、秦孝治郎、蜂谷為之、平田 甫、堀 慥爾が一つ長椅子に並んだ。

「君、どこの学校から来たの。誰かが「学校じゃない郵便局からだ」。皆が変な顔をした。京都の通信局の伝習所を了えて、出身地の滋賀県水口の郵便局で働いておったが、志を立ててやって来たのだ。もちろん年は組で

は最年長者で、当分は秦君と呼んでおったが、すぐ「おっさん」という仇名がついた。実社会で世間を見て来てるし、体もがっちりしているし、独特の胸間声で意見を述べるので頼もしく思っ、「おっさん」にしてしまった。

よく組の面倒をみるし世話をするので四年になった時、副組長に押し上げられた。僕らが年を隔てているので小僧位に見えたに違いない。組長の日下部福太郎君が体が弱く、良い対象だった。東寮の三寮長、片桐哲先輩に薫陶を受けておったことは確かだ。後に寮長になった。学資の不足は苦学(アルバイト)をして補わざるを得なかった。朝早く牛乳瓶を風呂敷に包んで配達し、冬風吹きすさぶ中、

その頃中学部を普通学校と呼んでおった。各三十四、五名ずつA、B、Cの三組が一学

釣瓶井戸の端で瓶を洗っておった。又田井食堂給仕をして食費を稼いだり、日曜日には同郷の牧野虎次牧師のおられた京都教会の教師、教会の書記、又共励会の手伝いをして学資を得ておった。余り忙しいので他の学生たちと一緒に遊ぶことはおろか、勉強の方も滞りがちのようであった。宿題も友人の援助を得なければならなかった。ことに英語と数学は得意ではなかったが、国語、漢文と習字は得意であった。枯れた風格のある字を書くのでうらやましく、習字の苦手な僕は苦労したが、時に秦君の清書を下写しして出したら良い点をもたらしたこともあった。お父様が書家であったそうで、道理で筋を引いていたのだ。

恐らく京極通りへ出かけることなどは少なかったろう。運動も余りやっていなかった。運動など要らぬほど頑丈な体だったが、後で伏見の三十八聯隊に入り、甲種合格で一年志願兵少尉になったのも当然だ。一番嫌いだったのが音楽。僕らが合唱してるとよく冷やかしたものだ。

当時、同志社の名物に、秋の運動会に必ず全校の男生がはだかになり、二組に分かれて

紅白の旗を奪い合う公認の喧嘩がある。秦君もその時に攻撃隊の一人として大奮闘し、翌日は体が痛いと言っておった。

又、丁度三寮の前に土俵があって、時に角力をとって居たが、強そうなので小さい連中は遠慮して向って行かなかった。

在学中、組に二つの事件があった。一つは同級の大林福夫君が町のチンピラともめ事を起こして、朝の相国寺で決闘をし、刃物か鎖かで大怪我をしたことがあった。又組長の日下部君が健康のため絶食療法をやり出して、絶食のまま授業を受けに出て来るので、「大丈夫か」と皆が心配しておたら、ある朝、クラスで突然倒れたので大騒動を起こした。この二つの事件の時に秦君が自分で乗り出して、世話をしたり、交渉したりして処理してくれた。そして副組長として日下部君の仕事をしておったこの時に、親切な、しかも腕の切れる親分だと感心した。

実際、親分肌で、議論はするが敵を作らず、いつかまとめてしまいう人だった。腰がつよくて、信ずるところはどこまでも頑張り通し、人に使われることよりも人の上に立って使う方の人だった。将来は実業家になると言っ

おったが、実業家では無いと見ておった。

つまり江州人の良い方は備えておった。人をそらさず、争わず、頑固で、我意を通すというようなところ。しかし欠点としては八方美人で思い切った妥協をすることもあり、又他人の上に立とうとする気もかなりつよかったが、江州人の一部に見られるような、人をだましたり蹴落としたり誑かしたり、抜けめなく立廻り辣腕をふるったりするようなことは決してなかった。キリスト教的教養を身につけた江州人といったら良からう。

明治四十五年三月、級友九十一名と普通学校を卒業し、新制の同志社大学経済部に進んだ。僕を「平田君」とは呼ばず、卒業後も「杏さん」と呼び通し、時には公の席でも「杏さん」と呼んだ。その方が親しみがあつたからだろう。

昨年、毎年催す明四十五年例会を計画し、「今年は、僕も追悼の祈禱はしなくても良いね」と話しておったが、クラス会の直前に突然天に召された。明四十五会も秦君のお通夜をしなければならなくなってしまった。

(明治四十五年普通学校卒業
日本基督教団隠退牧師)

大学 経済科 時代

足 立 宇 三 郎

明治四十五年四月五日、新生の同志社大学では、第一回始業式を神学館の講堂において行なった。この式には、文学部委員長原田助、政治経済学部委員長徳富猪一郎、神学部教頭日野真澄、政経部教頭水崎基一氏らの訓話があった。なかにも徳富氏は「朋友切磋琢磨せよ」とて、徳川時代の荻生徂徠、北村季吟らの勉学を引例して、学業の成就是結局、各人の努力によるとさとした。

この日、京都の四月の空は雨気を含んでいたが、大学の教場に当てられた有終館の窓外の緑は、いよいよ濃く生氣をはらみ、校庭をゆききする教授学生の足取りも軽く、顔はみな輝いていた。

学生数は神学部十名、経済科四十名、政治

科十名、英文科十名程度だった。歴史のある神学部を別として、専任の教授は政経部三名、英文科二名、よって京都大学各科の諸先生に講義の大半を依頼した。修業年限は予科一年三カ月、本科三年の旧専門学校令によったものだった。

さて、経済科生の三分の一は、普通学校よりの進学生で、他は他中学と商業学校卒業生だった。クラスの編成がなったとき、順序として級長をきめねばならない。このとき、第一の候補に指名されたのが、実に秦孝治郎君であった。秦君は普通校にても毎年級長の実歴があった。今また衆望は君にあつまり、一面気の毒だったが、予科から卒業の日まで、君を煩わした。一方、学生としての君は、学費

自給のため京都教会の書記を担任していたから、科外活動に加わる余暇を持たなかった。

しかし身体は頑健で大身で、いつも意気軒昂だった。もともと性格は中庸の人だったから、勉強に全力を集中する方で無かったが、教場では、もつともよく質問をした。感心したのは、河中勘之助先生のドイツ語の講義にも参加し、ローレライの詩を独力で読める程度に進んでいた。

秦級長指導のもとに、予科一年三カ月は無難に経過し、本科に進んだとき、学生の間に、三年間の本科をいかに有効に利用すべきかの意見が出た。同志社大学は、なお将来の大学で、その育成は教授と学生の努力を待っている。このことは学校当局も自覚して、その編

成、学科の選択、教授の獲得につき識見を持って努力すべきであった。今、本学の現実は資力不充分にして、学校として教授の育成は皆無である。そこで一夕、経済科一回生全員協議の上、学校へ三ヶ条の要望をすることになった。一、大学長をおくこと、二、専門専



退学を命ぜられた学生

同志社退学防衛本部に別る

任教授を増員すること、三、図書館を充実すること。このうちには緩急があるから、第二の教授の増員に主眼をおき、これを文書にし、秦級長ほか六名が、水崎教頭の宅へ持参説明した。水崎先生は渾身同志社愛の人で、学校のため献身的だったから、要望書を読んで全身の血は逆流したといわれた。さもあらん。先生より原田社長へ伝達されたが、両氏においては即答はできない。その間に時間は経過して、授業にも支障を生じた。次いで本件は、更に東京の政経部委員徳富先生と古谷久綱、三宅驥一先生に説明の必要を感じ、自分ほか三名が東上して説明した。東京の諸氏は、立場のちがひもあり、思慮の余地を有したから、とにかく同志社は可能なる限りの最善をつくそうといわれ、古谷、三宅両氏は入洛、当局と協議のうえ、滝本誠一、藤谷光之助、組谷定治郎、阿部賢一氏を経済科へ、蟻川新氏を政治科へ増聘された。これは全く学校として最大の努力だった。このような運動の途中には脱線も起こるもので、一部の学生の行動が行き過ぎだったとして九名が退学を命ぜられた。彼らは織田信長の横死になぞらえて、寺町本能寺門前にて記念撮影をして東

西に別れた。本件の解決までに四十日だったが、その間、秦級長は硬軟適宜の舵取に苦心した。

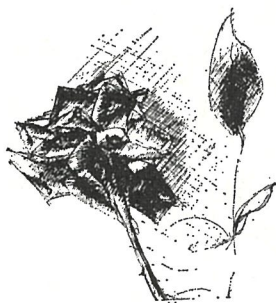
その後、学内は無風にて進み、大正五年七月に第一回の卒業式を行ない、秦君は水崎先生の紹介にて、大阪の久原鋳業株式会社へ就職した。久原は今の日立の母体で、青年が就職を希望した第一位の会社だった。彼は処世の第一歩において既に如才のないことを現わした。

彼と対照的に、自分は水崎先生より就職の斡旋をこたわられた。後日、先生はあるときは僕も狭量だったと陳謝された。自分は神戸の貿易商社鈴木商店へ入社し、翌大正六年十二月一日、秦、足立、柳島は深草の歩兵第三十八聯隊へ一年志願兵主計生として入隊し、第十一中隊の下士官室にて三人は寝台をならべて、起居を共にした。実に中学、大学、兵隊までも同行したため、互いに身上のできごととは簡抜けだった。

ああ、善かつ忠なる神のしもべ、同志社のために献身の理事長秦孝治郎君の有意義な生涯は、彼自身も満足のうちにおわった。

(明治四十五年普通学校・大正五年)
大学経済科卒・伝記研究家)

父を語る



「わが母校 護らん為めに 老の身を
ベツトに 伏して 只祈るのみ」

父が逝ったあと、出てきたポケットの中の
手帳にこの句があった。

父は、文学的などというわけでもない素朴な
俳句をよく作っていたが、すなおに心情が語

られている。

この句にも、同志社に全力を捧げていた心
境をうかがわせるものがある。

同志社に専念することになって京都に移り
住んでから、父は、それ以前の父と大きく変
った。

横浜時代の父に接した私は、青年期までだ
ったということもあるし、一緒に住んでいた
ということもあるが、そればかりではない。
たしかに変わった。

以前の父は、気が短く、われわれはよく叱
られた。いらいらしていたことも多い。カミ
ナリおやじであった。しかし京都に移ってか
らは、目に見えておだやかになった。そして
いつでも張り切っていた。同志社は、父の生

秦 克 彦

きがいそのものであったようにみえた。

青春期に与えられたキリスト教の信仰と、
新島先生に対する敬愛、学問に対するあこが
れ、青年への愛情などを、生涯持ち続けた父
にとって、そのすべてを満たす仕事としての
同志社があったことは、まことにしあわせな
ことであった。

父は長い間、おそらく昭和の始めから四十
年ほども露店の研究をしていた。私の少年時
代にも、その為秘書がいた。露店と名のつく
ものなら、新聞記事であろうが、雑文であろ
うが、片っぱしから集めていた。同志社に移
ってからも、研究を手伝った私の従兄を伴っ
て、香具師の資料を得るためにその道の親分
をたずねた話など、先日その従兄から始めて

聞いた。しかし学者でない父の研究の方法論は、素人のものでしかなかったのだから、その作業を通じて、父は学問への憧憬をたしかめ続けていたのではなかったか。

父は又、「青牛」と号してたわむれに書のまねごともした。青年のエネルギーと純粋さを愛し、いつまでも青年のごとくありたいとの祈りがその号にこめられていたと思う。

最後の年の八月にも、不自由な足をかばいながら暑さの中を、わずか三十名足らずの高校生の為に、琵琶湖畔まで、共励会の献身キャンプに出掛けて行ったのには、目を見張る思いがした。

あの学生紛争のはげしい時期にも、学生には親愛の情を持ち続けていた。心からにくにくしげに学生を非難するのを聞いたことがない。最後の学生とののはげしい団交のあとには、ついに父に会わずじまいであったが、ドクターストップで家に帰った父に電話した時に、学生がコートを着せてくれて嬉しかったということばかり言っていた。

「赤ヘルの学生己がコートぬぎ

われに着せたり、激論の中」

という句が、手帳に書きとめてあった。



ご家族とご一諸に

父の前で「寒い」とか「暑い」とかこぼしても、機嫌が悪かった。

その父が、昨年の理事長選挙のときには、めずらしく苦悩を語った。「俺が辞めることが、本当はいいのではないか。辞めようと思う。」かつてなかったことだけに、父の秘めた心にふれた思いがした。本当にどうすることが同志社の為になるのかと思ひ悩んでいた父は、親しい友人に相談をしたりしていたが、帰ってからしみじみとその友情を感謝していた。理事長を続けることに結局決まった時には、昔のように体が動かないことをはがりがりながらも、百周年記念事業に大きな夢をたくしていた。

召しは突然であったが、愛する母校にささえられ、母校でその生涯を終えた父は、どんなに満ち足りていただろうか。

できるだけはやったという充足感と、友情の支えに対する感謝にあふれて、天国への階段をしっかりと足どりで、意気揚々と昇って行ったに違いない。

柩には、ステッキを入れなかった。

(秦孝治郎氏嗣子・関東学院教師)

秦 孝治郎氏を偲ぶ



第28回日本ユネスコ運動全国大会にて
(1972年6月9日 東京、日比谷公会堂)

昨年の十一月二十五日は、まことに多忙な一日であった。まず最初に夏季自然観察展の優秀作品に、賞状・賞品を授与し、つぎに京都ユネスコ協会創立二十五周年の祝賀会を開催したからである。

私が会場で賞状・賞品を年少少女たちに授与しているとき、奥のドアをあけて秦孝治郎先生がはいってこられた。

一歩一歩ゆっくりとステッキをついて歩くお姿はけっしてさっそうとしていたとはいえないが、それかといって非常に疲れておられるようではなかったので、私はほっとした。私たちは秦先生が数日前に同志社で学生を相

手に長時間にわたって団交されたのを知っていたので、さぞお疲れになったのではないかと気づかっていたからである。

授与式が終って祝賀会が始まると、先生は湯浅八郎先生や難波紋吉先生などを相手に、愉快に談笑され、まったく普段と変わらない御様子であった。

私はこれらのユネスコ運動の巨人たちを横目で眺めながら楽しい気持ちになっていた。そして秦先生の発声で一同京都ユネスコ協会の万才を叫んで散会した。

参加者は三々五々退室して階下に降りたが私は残務があったのでまだ祝賀会場に残って

野 上 素 一

いたが、秦先生のお姿がみえないので事務局長代行の平林さんに尋ねると、もう先にお帰りになったというので、あわてた。

私は秦先生のお脚が悪いのを知っていたので、タクシーを呼んでお乗せしようと思っていたからである。

階段をかけ降りて先生のお姿を探したが、辺りは夕闇に包まれ何も見えなかった。

あとで聞くと、その頃京都ユネスコの常務理事の伊東祐純さんといっしょに会館近くの道を歩いておられたそうである。そして伊東さんがタクシーを呼びましようかと尋ねたのに対して、気持がよいから歩いて帰ろうといわれ、それから間もなく伊東さんの身体の上にのしかかるように倒れられたのであった。

その頃私はもう自宅に戻っていた。そして訃報を知らせる電話をきくと、タクシーで御池通りの救急病院へ直行したがすでに秦先生は、もの言わざる人になっておられた。

その時私の胸に浮かんだのは、二十年前に急死した亡父の姿である。父は、脳溢血の再発で、東京の自宅の二階でふせていたが、大分快方に向かい、丁度京都から到着した私と元気に話をしていた。だが、突然沈黙する

と頭を左にふって枕をはずし呼吸がとまった。われわれはあわてて医師をよんだが、もう手遅れであった。

人間の生命とはなんとはかないものであろうか。秦先生の場合も全く同じことを感じた。

あの時父は法政大学総長として終戦後の大学の復興のために忙殺され、ついつい無理がたたり、脳溢血で倒れ、一度よくなつてから大学に通い出したが、それから三年目に再び倒れて帰らざる人になったのである。秦先生の場合も同志社理事長として多忙な毎日を送っておられていたので、お身体を酷使されたのであろう。

このように御多忙な秦先生を京都ユネスコ協会のことで、さらにいっそう御多忙にしたことは、なんとおわびしてよいかわからない。しかし今となつては、帰天された先生の霊が安かれと祈るばかりである。

秦先生にはもっともユネスコ運動の御指導を受けたい気もあるが、神は善良な秦先生の魂を、汚濁したこの世から清浄な天国に早く召し給うたのであろうと思つてあきらめるほかはない。われわれの目下の義務は秦先生の示された多くの尊い訓言を胸に刻んで黙

々と前進することであらう。

(京都ユネスコ協会長)



秦先生と同志社教会

七、八年前の冬の朝、当時は午前十時から行なわれていた同志社教会の聖日礼拝に、いつものように出席した。讃美歌をうたい終った頃、パタツパタツと低い足音をたてながら先生が肩をゆすり、足を引きすりながら入ってこられた。けさはすこし遅いなと思ひながらみていると、中央の列の前から七つ目当りの、いつもの席にすわられた。一番前の席には南石福二郎先生がおられる。これで全員そろわれた、と一種の安堵感をもって牧師のお話に耳を傾けていった。やがて礼拝が終り席を立たれようとした先生が、ガックリ前にめられた。まわりの人があわてて抱き止め、事なきを得たが、「先生も弱られたな」と思ひながら玄関に出てきて耳にしたのは、前夜

来同志社教職員組合と先生を中心とする法人の給与対策委員会との間に団体交渉が持たれ、午前四時頃になりようやく解散したというニュースであった。すると先生は団交の疲れをおして礼拝に出られたのか。この一事は私の胸にこたえた。先生があゝまでして聖日礼拝を重んじておられるのにお前はどうか。教会生活に忠実であるか。私は身をもって範を垂れて下さった先生に心からお礼を申し上げたいと思う。

昨年の九月頃、礼拝後に定例委員会が開かれた。その日の中心議題は信仰の本質、教会観、教会員の資格に関係した事柄で賛否両論が出た時、先生が「そのようなことが承認されるなら、俱に天を載かず、私は教会を去り

仁 井 国 雄

ます」と強い口調で言い切られた。沈黙が支配した。先生の意見に賛同する者も、異論のある者もひとしく、今までに見たことのない先生の厳格な一面に触れた思いであった。

昨年の夏、瀬田の唐崎ハウスで西日本高校生献身キャンプが開かれた。先生は以前からこのキャンプのお世話役であり、例年必ず西瓜を高校生のために持参して参加された。

昨年は同志社教会員であり、女子高の二年生のSYさんが参加したが、西瓜の代わりに桃を持参して参加した先生のお姿に、限らない親しみと励ましを覚えたと追悼会で述懐していた。そういえば先生は卒業式の終りの理事長挨拶で、「十の学校を経営しております理事會を代表して」に始まる御挨拶で、生徒た



基督教共励会の献身キャンプにて
(1971年8月 唐崎)

ちになかなか人気があった。その秘密は先生の親しみやすい、くだけたお話ぶりのほかに必ず当日の生徒たちの送辞答辞の中から印象深い箇所を引用されることにあった。先生は送辞答辞を全部注意深く聞いておられたのである。教会でも事情は同じであった。各種の集会で人々の、特に若い人の話にホウホウト相づちをうって聞いておられた。きき上手の先生であった。

先生は讃美歌の時には大きな声で歌われた。教会の礼拝の場合には先生と私の定位置が離れているため知らなかったのだが、女子中高の卒業式の時、私の右に総長が左に理事長がおられ、先生はお年に似ず大きな声で歌われた。「エライ人」はこういう場合には黙っているものとばかり思っていただけに、始めて先生の歌声をきいた時は感動した。生徒と一緒に老理事長が無心に神を讃美しておられる。これでいいんだ。これが同志社だ。先生の横顔をぬすみ見ながら心の中でひとり感動していた。

教会では年に一回は講壇に立たれたが、それ以外に文書伝道もされていた。教会財政が苦しかった時にはタイミングよく「献金のすすめ」を印刷配布されたし、共励会の会長として機関紙をたびたび下さった。財務委員として経験乏しい会計係の私にいつも助言をしていた。洗礼・聖餐の二大礼典への参加、月定献金の確実な実行等々、先生は文字通り主の忠実な僕であった。

編集部からは教会生活を通してみた先生の横顔という御依頼であったが、学園での理事長としてのお姿と同志社教員としてのお姿

とが混り合ってしまった。そしてそれは当然であり、それでこそ同志社の理事長たるにふさわしいお姿だと思う。幸いなことに私は女子中高の教員であり同時に教会の一員でもあるため、先生は私にとって学校運営上の指導者であり、また信仰の偉大な先達でもあった。教会を離れた先生は考えられないし、学園と無縁の先生もあり得なかった。万一先生が教会生活をあのように忠実に守っておられなかったら、理事長としての先生は私にとって、はるかに遠い存在でしかなかったと思われる。

最後に先生の永眠直後に手帳に書きつけておいた感想を記載することをお許しいただきたいと思います。

永眠直後

一瞬に召されしことを告ぐるたび

受話器にきりて息のむ人々

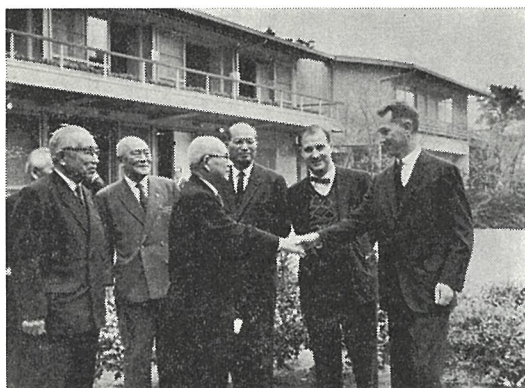
卒業式

登壇に肩貸す吾にかかりくる

わが師の重さ今も忘れず

(女子中高校長)

情の人―秦さん



アーマスト館ゲスト・ハウス献堂式のあとで
(1963年11月14日＝京都新聞社提供＝)

秦さんは確かに数少なくなっていく明治の人であった。お年寄りとか、ご老体とか、そういう意味でいうのではない。大正、昭和の人間にないものを持っていたからいうのである。たしか近江出身の近江商人式な味もっていたが、それもいやな商売根性よりも、庶民的な良さをもったことであった。あのちよっとかれかかったザル声の話し方、そしてあのニコニコ顔の笑い方は、今でも耳に響いてくる。あの陽にやけたおもしろいそばかすの顔、それに誰でも、どんなことでも聞いてやろうとする受け入れ方は、やはりどっしりすわったキリスト教の信仰からにじみでてる態度であって、いつまでも私の目にうかん

でくるし、消えるはずがなからう。

秦理事長の死去によって、わが同志社は新島襄の明治時代とついに縁をきらされたという感じがする。秦さんは新島先生の死んだ年、すなわち一八九〇年に生まれた人であった。もちろん顔を合わせたことはなかったが、深い縁ができることとなったのである。

「あの老人」という風に憤慨して、中年がかった、同志社を引きずりまわそうとする校友から聞かされたことがあるが、私はけつしてそういう風には秦さんをみない。不思議なことに「秦理事長」や「理事長」とか「秦さん」という風に呼ばれることをしよつちゅう聞いたことがあるが、私たちの間で「秦」と

オース・ケリー

呼びすてにされたことを私は聞いたことがない。秦という名前のごろが呼びすてにむかないといえはそれまでだが、私はやはりこれが別なことを意味しているのではなからうかと思う。

秦さんとくると私は数々の思い出がある。しかし何よりもその聞こうとする態度とまじめさとニコニコ顔は忘れることができない。

秦理事長は私の祖父にも習ったことがあったという。神学校の時間の上に、宣教師の休暇交替で、祖父が臨時に普通学校で英語を担当していた時のことだったらしい。そのせいか私をいつも「ケレーさん」と明治スタイルで呼んでくれていたのであった。「ケーリ」で通してきた私ではあるが、その呼び方がなつかしくて、うれしかった。

数々の思い出の中、私は三つの例を上げてみたい。七十いくつの老齢の秦さんがニューヨークのコロンビア大学の寮の部屋で、ステテコ姿で迎えに出てくれた。そのあとで、アーモスト大学まで車で運んであげた時のこと。アーモスト大学ではすべての事に非常な関心と好奇心を示した。いろんな日本人をアーモスト大学へ案内したことがあるが、あれ

ほど気持よかったことはめずらしかった。当時アーモスト大学で新島スカラーであった金田弘光君もいっしょだったが、彼のところへちゃんとお小使いを「こまっているだろうから」といって、かたをつけるような人であった。

私はアーモスト大学やアメリカとの雑用で理事長室にたびたびうかがうことがあった。いまだにたまげるのであるが、私との相談で電話連絡をしなければならぬ先がでてくるにつれて、ご自身で太い京都の電話帳をくって、みずからダイヤルを回す場合がたびたびあった。能率を重んずるアメリカのものとして、私は学校法人同志社の最高者の理事長がみずから電話帳の調べまでして、かけさすのがいまだになさげなく思う。秘書よりも交換手ぐらいがそれくらいのことをしてあげるべきではないかと……。

同志社のオアシスといわれるアーモスト館とそのゲストハウスの庭は、これも秦さんのお蔭である。足利義政の墓があったすぐ北側の墓地を相国寺が喜んで譲るという計画であったが、すぐ近所の何軒かがいろいろ言って、調停にまでもちこんで難行したのであった。

せっかくのアーモスト大学のアーモスト館贈呈にかざなつての、ふたたびの好意である以上、ゲストハウスを建てるのに此春寮をとうとう動かして建てることにふみきった。その此春寮が自治寮スタイルで先頭をきったが、幸いできあがったゲストハウスほど数多い海外、国内の学者や訪問客に喜ばれているところはない。名建築家といわれているゲストハウスの設計家の吉村順三氏がいみじくも「同志社のオアシス」と竣工式の時に言われたのは決して同志社の他が砂漠であったからだと私は信じない。しかし、秦さんなしにはできなかったことである。

秦さんは信頼できる人であった。明治調の文語体をこめた祈祷はもう聞けないリズムを響かしていた。しかし、信仰面のみならず、人間面、そしてそれを越えて国際面を、秦さんを失った同志社はいかにカバするであろうか、それを心配して同志社に関係をしている宣教師らは次のような文章を考えて、学校法人同志社の理事会や評議員会、校友会のメンバーに送ったのである。それをもって、外からのものである私たちがいかに秦さんなき同志社を心配してやまないかを汲みとって

ただきたいと思うしだいである。

*

法人役員、評議員、学校長、部館所長殿

秦孝治郎理事長のご永眠は同志社にとって大きな損失であり、私たちは心から哀悼の意を表したいと存じます。秦先生は私たちにあって、心の暖かい、豊かな見識を備えた友人でありました。いつでも相手になって下さいましたし、私たちの言葉にいつも注意深く耳を傾け、公正に問題を処理して下さいたことを感謝をもって思い出すものであります。

ところで私たちは、この時にあたり、同志社の国際的な立場に深い関心を抱かざるをえないのであります。秦先生は長い経験から、同志社の国際的な立場がどのようなものであるかを正しく認識し、そこから正しい判断を下した方でありました。このことは単に宣教師や宣教関係諸団体についてだけでなく、アーモスト大学、アンドバー・ニュートン神学校、カールトン大学、ハーバード大学、ハワイの諸団体等とのつながりについてもいえたのであります。

私たちはここに、同志社の国際的なイメー

ジが秦理事長の死去に伴って低下することのないよう、心から希望いたします。秦先生のような理解を示していただける方が同志社当局に出現してほしいとの願いを痛切に感じます。私たちもできる限りの協力を惜しまないつもりでありますので、海外における同志社のイメージがどうか一層立派なものになりますよう、皆様のご健闘を期待してやみません。ここ数十年にわたり、同志社は国際的に独自の地位を占めるようになりました。私たちの国際的な関心は、米国だけにとどまらず、他のすべての国々、いかなる人類にまで及ぶものであることは言うまでもありません。創立百周年が近づくにつれて、私たちは同志社のために、同志社人すべてのために、この輝かしいイメージを前進させたいと心から念願するものであります。

アリス・S・ケリー

オーテス・ケリー

ロバート・M・フカダ

ロバート・H・グラント

G・G・ロイド

ジョン・L・ロイド

アールデン・E・マッシュューズ

ジョン・W・ラッシー
ベヴァリー・D・タッカー
アン・ウイン

(翻訳文責 同志社本部庶務課)
一九七二年十二月四日

*

(アーモスト館長)



秦さんの意志の強さ

その円満な人格を偲ぶ



一、理事長就任のいきさつの巻

秦さんは早くから東京在住の先輩校友又理事の元老とでもいうべき小林正直氏や三宅颯一博士に伍して、所謂少壮校友として、東京勢をよく纏め、同時に血気に早やる関東の若い校友たちを指導して、潤滑油のような役目を

果たして下さっていた。そこで同志社本部員として、私はたえず秦さんと連絡をとって、東京工策を練っていた。いきおい私は東上の度に、まだ理事になられる前から、横浜のお宅に又は銀座の朝日スレート会社事務所にお訪ねして、色々相談をしたものである。

とかくする内に、同志社の実情は予算は年々膨脹し幾百万から幾千万に、遂には数億万円に上ることとなり、職員数も何十人から数百人を数えることとなり、とうてい、私共の手に負えなくなってきた。どうしても、母校には特に財政に明るく、又経営の力量のある専任の責任理事が必要になってきた。そこで私は在京都の石川、大沢両理事とも相談して、白羽の矢を秦さんに射当てるべく、特別

面談の時機を得たのであった。

(時) 戦後早々のある年 ある日

(所) 横浜市六角橋の秦邸

奥村「秦さん、あなたは生粋の同志社マンとして既に実業界で成功をされました。これからは、一つ思い切って母校のため余生を捧げていただきたいとの勧誘に來ました。」
秦兄「それは大変なことで、同志社は内外、なかなかむづかしいところだからネ。」

奥村「かく申し上げる私の裏には、京都大阪勢の理事はもちろん、同志社の元老教職員たちも同意見でもあるので、今直ちにとは申しませんが、漸時東京と京都とをかけ持ちで、お引き受け願いたいと思います。」

秦兄「マア考えましよう、東京の先輩たちと

奥村 龍三

もよく話して見ましよう。」

こんなことがあって後、間もなく秦さんは腰をあげて母校の為に重責を背負って下さるようになった。その後学校法人学制改革があって理事から理事長に就任され、その後の忍耐強い、又華々しい活動が始まったことは衆知の通りであります。

二、全国区参議員候補に社会党から出馬、失敗の巻

秦さんの生涯でただ一つの失敗があった。それは、秦さんが誰に勧められたのか、社会党から全国区参議院議員に出馬されたことであつた。私も狩り出されて、大いに運動しました。毎晩のように京阪神の演説会に応援弁士として、牧野虎次先生を始め、多くの同志社人の応援もありました。円山の夜桜に集まる群衆に向かって応援演説をやったこと、又秦さんの郷里、滋賀県の水口町や信楽町辺りを廻ったことを記憶しています。結果は落選ということで、当てにしていた北海道や九州の票が思っていたより少なかったとか、社会党が案外力になってくれなかったらしいというので、秦さんとしては、某会社よりの引

退感謝金を全額選挙費用に費消されたので私共は本当にお気の毒千万であると痛感した次第であつた。

しかし、あの時秦さんが社会党から参議院議員に当選しておられれば、どういうことになったであろうか……或は二期又三期と政界から足を洗うこともむづかしくなり、社会党を地盤にして政界人として活躍されただろうことは確かであるが、秦さんが同志社の為め困難な教育行政に献身され、そして稀有の功績を残して、同志社から、又アーモスト大学からも名誉学位を、否数十万の同志社人や多くの社会人から、教育行政の大功労者として記憶される御生涯はなかつたことと思われ。又ロータリーの世界で、名ガバナーとして奉仕こそが理想というロータリー精神を深く多くのロータリアンに植えつけられ、そして多くの知己を母校に結びつけなかつた功績もなかつただろうと思うと、選挙の失敗は同志社にとっては大きなプラスであつたと想像してもいいと思う。——それが矢張り神の深い計画であつたというべきであつた。

最後に、私は秦さんを思い出して一番感心

する一点は、秦さんの忍耐強さ、意志力の強さを記憶したいと思う。秦さんほど、感情を顔に現わさない人は少ないと思うし、又やり出したことは徹底して終りまでやり抜こうと努力される、あの辛棒強さは近江商人の血をうけ継いでおられたと思う。

E・C運動のことは、誰かが記述されると思うが、E・Cすなわちクリスチャンエンデバー運動で、今日一般基督教界では余り華々しくないが、昔時、原田助先生や、牧野虎次先生が大いに指導された運動であるが、それを秦さんが引き受けられることとなり、困難のなかに、実に、辛棒強く努力を続けられ、E・Cの日本代表の外、世界のE・Cの副総裁の地位にもつかれることとなつたのである。

近來、秦さんほど辛棒強く母校に貢献された方は稀有である。実に立派な同志社マンであつた。この印象は永久に私共の脳裡から消えることはないだろう。母校は実に第二、第三の秦さんの出現を渴望している。

(明治四十二年普通学校卒)
校友会理事・元同志社理事

徳富精神と秦孝治郎先輩

田 畑 忍

秦さんとのつき合いは、私が理事に就任した昭和二十五年頃からで、交友二十数年ということになる。

秦さんは、新島先生を熱愛する徳富蘇峰先生を尊敬して、学生時代から親しくされていた。だから、同志社の理事になり、理事長になったのも徳富「命令」だったのだと、どこかに書かれていたことがある。

戦後になって私は徳富先生を知ることになった。何故か大事にして下さったのと、恩師高木庄太郎先生がクラスメートだったということもあって、秦さんは私に幾分の好意を示されたのであろう。昭和二十七年七月三十日付の秦さんのハガキに、「拝啓 此度全学連の侵入に付て御迷惑の点有之様被存候へ共第二日の所置は校友として亦校外より見て妥当、適切と存じ敬服感佩罷在候、本日徳富翁

も同感の様取仕候（以下省略）」とあるのを見て、その様子が伺われよう。文中「校外より見て」とあるのは、その時、秦さんは校外理事の一人だったからである。

その後、秦さんの同志社に対する関心はとみに強くなった。また秦さんは私の大学経営方針（昭和二十七年から九年）の支持者でもあった。ことに、関東・東北への大学エキステンションには、片山哲さんとともに非常に尽力された。

昭和二十九年六月、私は二度目の学長を辞し、また理事を辞任（一期間）した。その翌年、大塚総長が兼任の理事長を辞し、そのため、会社経営を抛って後継者になった秦さんは、全晩年を同志社に奉仕されることになった。言い換えると、十八年間の「秦」時代がそれ以来つくづくことになり、前半は大塚総長

を、後半は住谷総長を、極力助けられた。というよりも、総長職も兼ねられたかのごとき観さえあった。従って、大塚先生も、住谷先生も大いに安心ができたであろう反面、些か手持無沙汰のようにも見受けられた。

「言いたいこと言い」の私は、秦さんに対しても、よく無遠慮な批判をした。しかし秦さんは怒らなかった。理事長としての秦さんには、決定や約束を、一部に強い反対があるの実行に移さないくせがあった。それで憤激した人は、知っているだけでも二、三にとどまらない。秦さんが一番信頼されていた大沢善夫君も、そのような中学移転問題のあとにさっさと理事を辞めてしまつて、だれが慰留しても聞き入れなかった。

秦さんの方ではしかし、大沢君の英知をその後に於ても利用することを忘れなかった。

このような秦さんをズルイと言う人もあった。しかし私は、批判もする一方、何か学べきものがあるようにも思っていた。

ただ、昭和四十四年から五年の学園紛争のさい、立命館大学の教室を入試のために拝借しながら、先方の入試には同志社大学の教室を俄かに貸さなかった「企業的」エゴイズムに、私は義憤を感じ、二月の理事会で徹底的に追及したことがあった。しかし、形式的なその責任は結局、学長に在る。学長代行の斎藤亥三雄君をそのため辞任に追い込むことになってしまった。私が理事を辞したのも、この四十五年である。

秦さんが、組合との団交を好きで熱心であったことは周知されている。始めは一步も引かないジェスチュアを示しているが、「座り込み」の或る段階になると、組合の強い要求を必ず或る程度呑むのを常とした。退却する寅年の秦さんは、「虎」ではなくて、静かなる「猫」のごとくであった。私は、そのとおりのことを言うと、秦さんは苦笑しながら背いたものである。もちろん組合は、秦さんのそのタクチックと妥協性を愛好した。要するに、秦さんは、「道理貫徹」とか「百万人と雖もわ

れ征かん」というような「猛進」型ではなくのんきで、エーブルで、要領がよく、親切で常識的で、思いやりもあり、決してわからず屋でなく、その考えには巾があった。学生との団交も嫌いではなく、学生パワーに興味をもち、巧みに取引的に解決を計った。しかも、学生の不甲斐なさに対しては、些か批判的であった。もちろん、学生を「道理に従って引っぱってゆく」というような強腰の構えを望むのは秦さんには無理であった。しかしそうしたソフトなキャラクターの故に、恐らくは同志社にはめずらしく行政者として長続きがしたのであるうと思われる。



二宮の蘇峰堂前にて（一九六九年一月二十四日）
（左より、秦孝治郎氏、筆者、住谷総長）

そのこととも関連があるが、秦さんは何といても愛校家であり、愛校の点で徳富先生に似たところがあった。いわば、徳富精神の継承者だった。文章もうまくて、あのハスキーヴォイスのスピーチには一種独特の味と貫録があった。このような秦さんを喪った同志社はやはり寂しくなった。

秦さんはかなり前から脚部が弱っておられるように見えた。しかしフレキシブルな頭脳は、いっこうに衰えを見せず、なお十数年は元気で十分に百週年に対処されるだろうと思っていた。

昨年の役員更迭期に曲折を経て理事長になった秦さんは、これまでのノン気さとはちがって何かきりっとして、真剣に同志社の危機に取っ組み決意と奉仕の構えをされていた。それは、理事長就任の直後の手紙と、逝去の二週間ばかり前の電話から、特にそう私は感じたのであった。

だから、「天意遂に計り難い」というのが、今の私の感想である。

（元大学長・現大学名誉教授）

同志社創立九十周年記念事業と秦孝治郎氏

青 木 正 太 郎

昭和四十年十一月完成を目標とした同志社創立九十周年記念事業は、昭和三十五年十一月および昭和三十六年一月開催の学校法人同志社理事会においてその方針と計画が承認され、翌二月に事業主体として記念事業委員会（委員長＝大塚前総長、後に秦理事長、副委員長七名＝秦理事長、後に住谷総長ほか六名〔大学長、評議会議長、校友会長、同窓会長、連合父兄会長、同志社会長〕、顧問代表一名＝石川芳次郎氏）が、また募金実行機関として記念事業事務局（後に理事長室に改組）が設置され、五月には財界、教育界その他より五十名を顧問に、同時に全国の校友、同窓、父兄等より約千名を各都道府県募金実行委員に委嘱して、本格的な募金運動に踏み出したわけである。それ以来昭和四十四年九月末まで実

に八年有余にわたる長期の募金活動と、かつてない広大な事業計画が実施された次第で、私は昭和三十七年九月に大学より転勤を命ぜられ、事務長として前任者加藤柘氏の後を受け、本事業の終結まで大塚、住谷両総長、秦理事長の指導のもとに、募金事務にとり組んだ次第である。今その当時を回顧して、秦孝治郎氏の片鱗を事務局の様相と募金成果との関連において記そう。

事務局の組織は募金委員長の秦孝治郎氏、副委員長の山田貞夫氏の統率のもとに、本部事務所として事務長以下募金係の小野義夫、森信輝、上田千代次の各氏、ほかに庶務係二名、東京事務所として東京分室の牧田義夫、河村秀東洋、稲葉好道の三氏（末期には青山昇氏に引続き長野武氏）とそれに庶務一名の

併せて繁忙期に十名、終末期に四名の陣容をもって法人、卒業生、父兄、教職員、海外その他と募金対象を各分担して、募金額十億円、学債額五億円、計十五億円の目標総額の達成に邁進したわけである。かくして昭和四十四年九月末の終了時においては、当初予定の期間以上を費やしたが、寄付金額は大口法人より貧者の一炉まで併せて目標額の八七・三%、学債額は初期短期間に一〇〇%の満額応募を受け、同志社募金史上にかつてない実績を挙げたわけである。

このような成果は、固より同志社九十有年間の歴史と伝統と社会的評価とにより、募金懇請先の本学に対する絶大な理解と支援とによるところであるが、その前に募金委員長としての秦孝治郎氏の積極的な募金活動と指導



創立90周年記念の植樹をされる秦孝治郎氏

力を軸に、関係各委員および各学校の協力、事務局始め本部挙げての協力体制による推進活動の結果によるものとみるべきである。ことに秦孝治郎氏は理事長としての日常激務の間隙を縫うて、老駟をいとわず全国各地方の校友、同窓の会合を歴訪し、懇請する機会を重ね、またその都度地方の有力法人を訪問するなど、その行動範囲は北は北海道から南は台湾まで拡大し、ことに大阪、東京、名古屋

方面の大口法人に対しては、再三連日にわたり、歴訪懇請する努力を重ね、募金の種播きから収穫まで全生命を掛けての活動振りであった。募金運動開始後より経済事情は逐次逼迫の度を加え、財界不況時にもかかわらず、永年にわたっての活動の結果、法人については目標額の三億二千万円を突破するの実績を挙げたことは、偉とすべきものがあつた。

しかしながら、その成果の蔭には事務局員のなみなみならぬ苦勞があつた。例えば繁忙期においては、毎日毎日募金委員長を囲んでの事務打合せが強行され、法人、卒業生、出入業者、協力者等その日その日の歴訪先の決定、実績報告およびそれにもとづく将来の推進方法の検討等全員息抜きする暇もなく直ちに實際活動に飛び出さねばならない全くの募金活動に明け暮れ、年次休暇はもちろん、夏期休暇をも返上せざるを得ない勤務状態であつた。また募金委員長その他の委員と度々同行する地方出張には訪問先との事前交渉、出張準備、訪問後の処理等非常に煩わしいものがあつた。また訪問先にて余り執拗に懇請したため、かえって礼を失するようなことも度々あり、募金活動のむずかしさをしみじみと

感じさせられた。また事務局員の非常な努力にもかかわらず、その成果が挙がらず、募金委員長の叱責を受け、一瞬憤懣やるかたなきものがあつたが、心気一転してその後に対処したことも屢々あつた。これらはいずれも、学園同志社の発展を願つての積極的な秦孝治郎氏の面目の顕われとみるべきである。

かくしてこれら募金募債による貴重な資金と各学校からの別途財源とを併せて総額二十九億二千余万円の巨費をもって大学から幼稚園まで傘下十校の教室、研究室、体育館、学生会館、寄宿舎等の建設および改修、研究用機械器具の設置、研究費の積立、奨学資金制度の拡充、本部関係では精神教育基金および特別積立金の積立、ゲストハウスの完成、校友用施設の改装、北小松学舎の完成、岐阜植林地の購入、同志社九十年小史の刊行等完成をみたわけである。

かくして時は移り、二年後には同志社創立百周年を迎えんとするにあたり、創立九十年記念事業遂行のため挺身奮闘された秦孝治郎氏の面影がまるで走馬燈のように私の頭の中を駆け廻るのを覚える。

(社史史料編集所主任)

団交の中の秦さん



秦さんと私のつきあいは、理事長対連合委員長という肩書きの息のつまる関係に終始したといつてよい。役職をはなれているときも、そのような対立を意識せずにいたことはお互いほとんど無かったのではなからうか。だから秦さん個人の私的な生活や人格の美しさなどをふくめて、人間像の全体を浮き彫り

にすることはとうてい出来そうにない。

けれど、たとえば硬直した団体交渉のさ中にあっても、おそらくお互いに無意識のうちに、敵視と不信を避けて妥結に近づけてゆこうとする良識と寛容がはたらいていたといえれば叱られるであらうか。そのことは、組合の立場からいえばあいまいな妥協を意味したかも知れないし、私個人の非力や戦闘性の不足にかかわる部分も多くあったにちがいない。

しかし、一方秦さんに即していえば、そうさせる何かを秦さんの人間味が持ちあわせていたような気がするのである。結果は決して満足すべきものではなかったし、解決というにはほど遠い問題がたえず残されつつづけてきた。にもかかわらず、幸か不幸か秦さんは組

里 井 陸 郎

合の側からみても、やはり名理事長たるに価する能力的な個性を持つ人であったと思う。そしていうまでもなく住谷総長にとつてはかけがえのない名博労であった。

総長と理事長の両輪が拮抗して円滑に回転しているかぎり、同志社の現代史は、大巾な軌道修正を切実に求められることはなかったのである。

しかしながら、秦さんの晩年、私にとつては二度のつとめであった七一年委員長の時代になると、秦さんの個性や人格とふれあう機会が、団交という形式においてすら、もはや経験することを許さなくする状況ができてしまっていたのである。いわゆる給与対策委員とは別に、団体交渉委員がきめられ、そこか

ら閉め出された秦理事長は、かの変幻自在な戦略を披瀝する場所と機会をついに永久に失ってしまったのである。

団交そのものが頭から拒否され、理事会対組合の關係が完全な空白と断絶を余儀なくされるにいたったいきさつについては、ここで語る必要はないであろう。しかし、あえていえば、同志社戦後史はじめての、この暗澹たる空洞は、秦理事長らによって象徴される同志社の良心と伝統が、理事会の内部において疎外されることからたらされた側面があると私は判断している。

理事長みずからは、誰とでも、何人ともでも会って話をする用意があると公言してはばからなかった。事実、理事長という職責上、教職員と会い、その声をきく、唯一の場が団交でしかなかったという皮肉な運命の、おそらくは索漠たる孤独に堪える根性と善意を私たちは彼の中に見たのでなからうか。近年の口ぐせであった「理事長は組合に弱い」云々の内部批判はおそらく事実であつただろうし、それが交渉委員長の責から理事長を自他ともに退かせる口実ともなり得ただろう。しかし、真相はもっと別の次元にあつたことを、歴史

はすでに証しつつある。

学園紛争の余燼（じん）がくすぶりつづけている中で、同志社のおかれている内外の状況に対する客観的な認識や、教育・研究と経営の行く先に対する見とおしの上で、何が最も核になるのかという基本的な観点で、私たちはむしろ理事会の中の良心的な人々との共通の基盤を見つけ出し創り出してゆくことに力を割いた。それが、再開された制限団交の中で、のぎりぎり説得性をもった論理の骨格であり、三役交渉の段階で、直接理事長と談合する機会を通じてようやくに実感し得た人間的なふれあいの根拠であつた。

今日の殺伐とした危機を克服し、明るくひらかれた自由で民主的な同志社の伝統を真に回復し、創造する道は、なお遠くけわしいけれど、この大切な時に当たって秦理事長を失ったことは大きな痛手というほかない。

心持ち肩をそびやかすようにして有終館の階段をのぼってゆく秦さんの後姿をおもひにかべると、新島先生の遺（のこ）した、形に見えぬあるものが秦さんの古武士然たる風貌の中ににじみでていたような気がしてくる。

当局回答を提示するときのもったいぶった口調、憤然として席を立つ勢いを示すかと思えば、破顔哄笑たちまちにして失言を陳謝してはばからない秦さん独特の団交技術。結果はともかく教職員の切々たる訴えに耳を傾け、真実感動の色をかくそうとしなかった情味ある応酬。数々の記憶と印象に残る団交風景の中から浮き出てくるものは、虚々実々のかけひきやその場かぎりのとりつくろいとはちがった真率な人間性そのもの、枯淡の中にこくと味のある秦理事長の風格そのものである。

古き日の同志社の良心の中に秦理事長の名を書きつらねたいとおもう。

（大学文学部教授
元教職員組合連合委員長）



カヅト・池田陸男

秦 孝 治 郎 氏 略 歴

- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1890 (明治23) 年 2 月 16 日 | 滋賀県甲賀郡水口町に生まれる |
| 1907 (明治40) 年 3 月 | 滋賀県水口教会において受洗 その後京都教会
横浜紅葉坂教会を経て同志社教会会員 |
| 1912 (明治45) 年 3 月 | 同志社普通学校卒業 |
| 1916 (大正 5) 年 7 月 | 同志社大学政治経済学部経済学科卒業 久原鉱業
株式会社入社 |
| 1921 (大正10) 年 7 月 | 日本連合基督教共励会会長 |
| 1923 (大正12) 年12月～1950 (昭和25) 年 8 月 | 朝日スレート (現朝日石綿工業) 株式会社創立入
社後取締役社長 相談役 |
| 1924 (大正13) 年 5 月 | 久保田善恵姉と結婚 |
| 1936 (昭和11) 年 4 月 | 同志社校友会理事 |
| 1937 (昭和12) 年 4 月 | 財団法人 (後学校法人) 同志社理事 |
| 1939 (昭和14) 年 8 月 | 福祉法人家庭学校理事 |
| 1949 (昭和24) 年 4 月 | 学校法人横浜共立学園監事 |
| 1949 (昭和24) 年 5 月 | 日本ユネスコ国内委員会委員 |
| 1949 (昭和24) 年 8 月 | 帝国紙業株式会社取締役会長 |
| 1950 (昭和25) 年 5 月～1961 (昭和36) 年 3 月 | 学校法人桜美林学園監事 |
| 1950 (昭和25) 年 9 月 | 横浜ロータリークラブ入会 |
| 1951 (昭和26) 年 5 月 | 万国連合基督教共励会副会頭 |
| 1952 (昭和27) 年 4 月～1972 (昭和47) 年 3 月 | 同志社校友会副会長 |
| 1952 (昭和27) 年 8 月 | 日本ユネスコ協会連盟副会長 |
| 1954 (昭和29) 年 8 月 | 学校法人同志社理事長 (連続 7 期) |
| 1955 (昭和30) 年 6 月 | 京都ロータリークラブ入会 さらに京都北ロータ
リークラブ創立のため当クラブへ入会 2 回会長
に就任 |
| 1957 (昭和32) 年 5 月 | 日昌硝子工業株式会社取締役会長 |
| 1957 (昭和32) 年 7 月～1958 (昭和33) 年 6 月 | 国際ロータリー第365地区ガバナー |
| 1958 (昭和33) 年 5 月～1967 (昭和42) 年11月 | 株式会社毎日放送取締役 |
| 1958 (昭和33) 年 5 月 | 毎日放送教育テレビ会議理事 |
| 1964 (昭和39) 年 3 月 | 京都ユネスコ協会理事 |
| 1964 (昭和39) 年 5 月 | 京都民芸協会理事 |
| 1965 (昭和40) 年11月 | 勲二等瑞宝章受章 |
| 1967 (昭和42) 年10月 | 社団法人日本私立大学連盟財務担当理事者会議副
議長 |
| 1971 (昭和46) 年10月 | 名誉文化博士 (同志社大学) の名誉学位受領 |
| 1972 (昭和47) 年11月25日午後 8 時25分 | 永眠 |